

# 原因・メカニズム探る

学習障害(LD)や注意欠陥・多動性障害(ADHD)、自閉症など、子どもの発達障害を学際的に解明するため、大阪大と浜松医科大学などが今年4月、「子どものこころの発達研究センター」を設立した。大阪市内で今月15日に初めて開かれたシンポジウムでは、発達障害の原因やメカニズムを探るための多くの研究成果が紹介された。

発達障害の一つで、知能や言葉の遅れないが対人関係に悩みを抱えやすいアスペルガー症候群。浜松医大の森則夫教授(精神医学)らは、感情を制御する神経物質セロトニンの伝達を阻んだらばく質「セロトニン・トランスポーター」に着目。陽電子放射断層撮影(PET)で調べると、患者は健常者に比べ、脳の広い範囲でこのたんぱく質の量が少なかった。

森教授は「生後の早い時期にセ

## 発達障害テーマに初シンポ 阪大など

ロトニンの神経伝達を正常化する治療薬を開発すれば、障害を最小限に抑えることができるのではないかと指摘した。

大阪大、浜松医大と連携する金沢大医学系研究科の東田陽博教授(神経化学)らは、運動の学習に関係すると見られる物質をネズミの脳内から見つけた。記憶を神経細胞に伝える物質を調整する働きもしており、発達障害を解明する手掛かりになるといふ。

大阪大の谷池雅子・特任教授(発達神経学)は、発達障害児が睡眠障害を合併しているケースが多いことを報告。睡眠時無呼吸症候群の子どもに口と鼻を結ぶ气道を広げるアデノイド切除手術を行い、昼間の異常行動が改善された例を紹介した。谷池教授は「発達障害と睡眠障害の関係を解明することも今後の研究課題だ」と話した。